

『雨の向日葵』 作…岩本憲嗣

■あらすじ

吉祥寺北高校演劇部部长・松岡操。演劇のト素人だ。

1歳上の姉、岬に頼まれ廃部寸前の演劇部に名前だけ貸す……つもりだったのが、半ば無理矢理連れて行かれた小劇場演劇に魅せられてしまう。

だがその姉は今は演劇部にはいない。

観劇後に立ち寄った雑貨店で事故に巻き込まれ未だに意識が戻らないのだ。そして演劇部は新入生の退部騒動で再び廃部の危機に瀕しようとしていた。

そんな折、思いがけぬハプニングから操は意外な人物に出逢う。

笹君香。岬と観た芝居の主演女優。

彼女は操の親友の兄の恋人だと言うのだ。

操は彼女に演劇をゼロから教えて欲しいと懇願、了承を取り付ける。

こうして君香による演劇部の再生計画が動き出す。

殺陣を取り入れた作戦が見事に嵌り部員は一気に倍増。

これならば上位の大会に進める。今はここにいない姉の願いも叶えられる。

新生演劇部は順風満帆のように見えていた。

しかし、君香には誰にも話すこと出来ない大きな秘密があった。

彼女の前に頻繁に現れる梅山という謎の男はこう訴え続ける。

『その体を返して下さい』

今ここにいる君香には岬の心が宿っていた。

そう、実は君香も岬と同じ事故に巻き込まれており、その際に体と心が入れ替わってしまったのだ。

本来ならば強制的に戻されるべき案件。

だが何故か岬の中に眠る君香がそれを拒んでいた。

岬として眠り続ける君香。

君香として演劇に携わる岬。

実の妹や友人を前にしても君香として振る舞い君香として生きるしかない。

それは想像以上に辛いことであった。

同じような辛さを操もまた味わっていた。

姉のように振る舞って姉のように演じる。それを自分に強い続けた操。

そんな最中、操は君香が岬と同じ事故に遭っていたことを初めて知る。

君香に姉の思い出を語る操。

二人はお互いの想いを知ること自身抱える問題を乗り越えるヒントを得る。

やがて迎えた地区大会。

操は前日に岬の机の中から一通の手紙と便箋を見つけていた。

それはかつて岬が君香に宛てたファンレターの返事。そして君香が書いた脚本と同じタイトルメモ。

それらを見た操は君香の正体について確信を得る。

そしてその手紙の内容にこそ岬の中に眠る君香が現状を放任している理由があった。

それから数日。地区大会を勝ち抜いた演劇部の中心には本当の君香がいた。

そう二人は互いに元の体に戻ったのだ。

しかし君香は変わらず演劇部のコーチを続ける。それが君香と岬、二人にとっての願う形なのだから。

#### ■登場人物

松岡操（まつおかみさお・♀・17歳・演劇部部长）

笹君香（ささきみか・♀・27歳・小劇場の舞台女優）

松岡岬（まつおかみさき・♀・18歳・操の姉）

大見紀絵（おおみきえ・♀・18歳・演劇部3年）

佐東飛鳥（さとうあすか・♀・17歳・操の親友）

浜田和巳（はまだかずみ・♀・16歳・演劇部1年）

新堀龍太（にいぼりゆうた・♂・16歳・剣道部1年）

前山直樹（まえやまなおき・♂・16歳・龍太の友人）

厚木一彦（あつぎかずひこ・♂・16歳・龍太の友人）

宇藤美奈（うどうみな・♀・16歳・飛鳥の友人）

高原結衣（たかはらゆい・♀・16歳・美奈の友人）

佐東正太郎（さとうしょうたろう・♂・30歳・飛鳥の兄）

岸本敦（きしもとあつし・♂・29歳・小劇場の役者）

小田中浩二（おだなかこうじ・♂・45歳・演劇部の顧問）

梅山ユウ（うめやまゆう・♂・38歳・君香の前に現れる謎の男）

#### ○小劇場・舞台上

舞台上には美しい衣装を身に纏った君香。

それを取り囲む多くの役者たち。それぞれ手には武器を持っている。

君香、大勢を相手に華麗な大立ち回りを演じて魅せる。

操M「ねえ、お姉ちゃん。私全然知らなかった……ここにはなんだったってあるんだね」

君香が両手を天に翳すと鮮やかな赤と青の眩い光が辺りを包む。

操M「全てを燃やし尽くす灼熱の炎に凍てつくような冷たい風」

君香の前に敵のボス役と思しき役者が立ち塞がる。君香が立ち向かうが苦戦。

操M「絶望を乗り越える為の勇氣も。それを支えてくれる心強い仲間も」

君香を助けに仲間たちが現れると共に戦いどうにかボスを打ち破る。

操M「圧倒的な爽快感っていうか格好良さっていうかさ……」

カーテンコールで一列になり客席に礼をする君香をはじめとする役者たち。

操M「私は魅せられちゃったんだよ。そう、そのたった一回で完全に虜になっちゃったんだ！」

#### ○吉祥寺北高校・演劇部部室

狭い室内。長机越しに向かい合った飛鳥に熱弁を奮う操。

操「とにかく迫力が凄いのなんのってさ！救世主の女剣士が敵を次から次へと……」

飛鳥「バツサバツサと、で炎やら氷の魔法も使うんだっけ？」

操「そう、それも全部音と照明で……」

飛鳥「ちゃんとそう見えてさ！飛鳥にも見せてあげたいよ……だっけ？」

操「え！？飛鳥何者？まさか予知能力者？」

飛鳥「ってより刷り込み。（スマホを弄りながら）ってか、その話何回目よ？」

操「またゲーム？ダメだよ現実を見ないと！ほら、私はね、一緒にあぁいう鼻血ブーな演劇を創りたいの！うん、創らないといけないの！！」

飛鳥「はいはい、じゃあ仰せのままに現実をみつめるとしましょ。演劇作るにあたってウチらに足りないものは何でしょう」

操「飛鳥の情熱！やる気！それと愛……」

飛鳥「ブー。ヒト・モノ・カネでしょ？もう6月も終わるってのに新入生あのクソ生意気な子だけでしょ？あと紀絵先輩？たった4人でどうするわけでしょうか。その辺のビジョンを是非ともお伺いしたい。ブチョー殿」

操「ビジョン？そうか……ええと……じゃあ……とりあえず活動しよ、そう！発声練習と

か！」

○コンビニ・店内

おにぎり2つをレジに出す君香。財布を開くと中は心許ない。小さくため息をつく。

君香「ごめんなさい、やっぱこっただけで」

結局おにぎり一つだけを購入。入口にあるラックからバイト情報誌を取ると店を出る。

○公園

ベンチに座っておにぎりを食べながらバイト情報誌を眺める君香。すると電話がかかってくる。画面には【正太郎】の表示。そのまま電話を切る。

君香「……ごめんなさい」

気が付くと背後に梅山が立ちバイト情報誌を覗きこんでいる。

梅山「水商売はダメですからね」

君香「え！？だ……誰？」

梅山「あれ？覚えてないです？そうか、あの時は別の……」

君香、荷物を纏めて距離を取る。

梅山「そんな警戒しないで。私はただ返して貰いたいんです」

君香「まさか借金取り？嘘？そんなことするようには……」

梅山「お金なんて興味ないですよ。私が欲しいのは貴方の……体？」

君香「はあ？」

梅山「いやいやいや、変な意味じゃなくそのままの意味です」

君香「ひっ」

君香が走って逃げる。

○君香のアパート・外

君香が走ってやってくる。

君香「はあはあ、何なのアレ」

正太郎「あれ？あぁっ！ミカちゃん！？やっぱりそうだ！！」

2階の君香の部屋の前で正太郎が手を振っている。

君香「嘘……なんているわけ？」

君香、踵を返して走って逃げる。

正太郎「なんで電話でてくれないワケ……って、え？ちょ、ちょっと待ってって！何で逃げ……うわぁ」

それを追おうと走る正太郎。階段で転んでしまう。

○吉祥寺北高校・屋上

プリントを持った操と飛鳥。

操「(ぎこちなく)拙者親方と申すは、お立会いの内のご存知のお方もございませうが、お江戸を発って20里……じょうほう?……あいしゅう……こたはらひといる……」

和巳「相州小田原一色町をお過ぎなされて青物町を登りへお出でなされるれば、欄干橋虎屋藤衛門、只今は剃髪致して円齋と名乗りまする」

気が付けば和巳と紀絵がいる。

操「おおっ!流石だね和巳ちゃん!なんかプロみたい!」

和巳「流石でも何でもありません、そもそも漢字が読めないなんて論外じゃないですか。大体外郎売りの一つも覚えてないとか理解出来ないんですけど、それに……」

紀絵「蒲田さん、まあまあ」

和巳「別にいいですけど、もうあたしには関係ないですし」

紀絵「いや、だからね、もうちよつと考えて欲しいなっていうか……」

飛鳥「どうしたんですか紀絵先輩?」

和巳「部長。折り入ってお話があります。これ……受け取って頂けないでしょうか」

和巳、退部届を操に突き出す

操「マジで……嘘でしょ?」

○吉祥寺北高校・校門前

走って逃げてくる君香。

君香「はあはあ……本当にごめんなさい。分かってるよ。でもねそれは私じゃなくてさ……」

梅山「違うでしょ、あなたの彼氏の筈だ」

君香「え!?!」

君香が顔を上げると目の前に梅山が立っている。

梅山「知ってますよ、ずっと無視してるんですよ。いいんですかそんな勝手なことして、それを彼女が知ったならば……」

君香「黙ってよ!……私!」

正太郎「ミカちゃん!?!」

遠くで正太郎が君香を見つけ走ってくる。君香逃げようとするが目の前を梅山が塞いでいる。君香は高校の柵を華麗に飛び越えて校内に逃げる。

梅山「おお。体の記憶はそのままってことですか」

○吉祥寺北高校・屋上

操に退部届をつきつける和巳。操は受け取れないと手を上げている。

操「無理無理無理。紀絵ちゃん助けて」

紀絵「何度も説得したんだけど、その……」

操「もお……勘弁してよ、何で?一緒に頑張ろうって」

和巳「頑張る？何をですか？」

紀絵「うくん、きつと今からお芝居創って大会に出て……」

和巳「何の為に出るんです？」

操「それは……お姉ちゃんだったらそうしたなって。あ、それに演劇部は毎年……」

和巳「やつぱり……部長は何も考えてないんですね。だから毎日こんなどうしようもない活動しか出来てないんですよね」

飛鳥「あ、カッチンだわそれ。経験者だか何だかしらないけどさ、操も私もこの春に演劇始めたばっかりなワケ。知らないことだらけなんだよ？そんな中で操は演劇部を無くさないようにって必死に……」

和巳「演劇部って名前が残るだけで満足なら他の誰かを入れたらいいじゃないですか。そもそも目標が違います。あたしは国立に行きたいんです」

飛鳥「国立……競技場？」

和巳「違います。そんなことも知ら……」

紀絵「ああ、あのね、高校演劇は地区大会の後に都大会、ブロック大会、全国大会ってあってね。そこで一番になると来年の8月に国立劇場で公演が出来るの。蒲田さんはそのことを……」

飛鳥「いやいや、地区大会すら勝ったことないんですよウチ？」

和巳「これまでは知りません。でも去年は勝ってました……あたし見えましたから地区大会。圧倒的でしたからキチキタ演劇部は」

操「え？でも去年って……」

紀絵「あ……うん、上演時間を規定からオーバーちゃったの。1分だけ。それで上には行けなかったんだ」

和巳「部長のお姉さんも……私は舞台の上でしか見た事ないですけど、でもきつとあたしと同じ考えだったと思います。今年は全国で勝つんだって……」

操「そうか……和巳ちゃんの言うことは正しいかもしれない。でも一つ違うんだ。考えだっただって……それおかしいよ。だってお姉ちゃんは今でも……」

紀絵「操ちゃん……」

和巳「受け取って頂けないなら部室に置いておきます。今までお世話になりました」

帰ろうとする和巳。操、ダッシュで屋上の扉の前に立ち塞がる。

和巳「なんですか」

操「行かせないよ……ダメだよ絶対……だってそれじゃ……」

和巳「どいて下さ……」

操「きゃっ!!」

屋上の扉が思い切り開かれる。その衝撃で転んでしまう操。扉の向こうからは君香がやってくる。君香も勢い余って転倒。



操「どかない!! やっぱり……やっぱりそうだ!! 貴方救世主さんですよね!!」  
飛鳥「は？」

操「ほら、話したでしょー春休みにお姉ちゃんと一緒に観に行ったやつ！劇団クリコン館！出てましたよね！？救世主!! 女剣士!!」

正太郎「ああ、確かに彼女は小劇場で役者を……」

操「そうだ！そうしよう!! 救世主さん……この怪我の責任とって下さい!!」

君香「あ……お金はその……」

操「ううん。教えて欲しいんです演劇のこと！私は演劇ど素人だけど、でもお姉ちゃん願いを叶えたい。きっと全国で一番になるっていうその……だからその」

君香「願……い……」

和巳「部長？勝手に何言ってるんですか。大体クリコン館なんて知ら……」

操「お姉ちゃんが好きだった劇団。それに……お姉ちゃんが憧れてた女優さん」

和巳「え？」

操「お願いします！私たちに教えて下さい……知ってること全部!!」

○吉祥寺北高校・演劇部部室・外

操M「ねえお姉ちゃん……これでいいんだよね、これはきつとお姉ちゃんの望むことなんだよね。私は正しいことをしているんだよね？」

○回想…操と岬の部屋（朝）

岬の机のまわりは向日葵柄のグッズで埋め尽くされている。岬が忙しそうに外出の準備をしている。その物音で目を覚ます操。

操「あれ……今日も学校行くの？」

岬「そう。ほら、演劇部って新二年がいらないからさ、私たちが頑張って1年生入れないとヤバイんだよね」

操「あれ？結構人数いなかったっけ？」

岬「ほとんど3年生でみんな卒業しちゃったもん。新3年も私と紀絵だけだし」

操「それじゃ廃部じゃないの？」

岬「そう、もう風前の灯。誰でもいいから助けて欲しいよ」

操「そうか……ねえ、取引しない？なんなら名前だけでよければ貸すよ」

岬「マジで!! ねえ今の本当？武士に二言はない？」

操「わっ……武士じゃないけど二言はない。なんなら飛鳥も誘おうか？あの子も多分名前くらいなら……」

岬「(抱きしめて) 偉い！流石は私の妹!!」褒美にチューを……」

操「またそれ？いらないうって。そんかし去年の授業ノートを無償提供。特にオダテイーの古文」



岬「うわっ……人様の努力の結晶を……ガメつい奴め」

操「そりやお姉ちゃんの妹だし」

岬「あ、そ。……だったらさっと演技の才能もあつたりしちやつたり」

操「はい？」

岬「だから……名前だけと言わず一緒に芝居しようよ……って……はは、言ってみちゃった」

操「パス。『ああロミオ……』みたいな恥ずかしくて出来ませーん」

岬、操の寝るベッドを思い切り蹴る。無反応の操にプロレスラーのようなストンピングを連発。

操「ちよ、ちよちよちよ！何すんの！？」

岬「アンタ何も分かってないね。私のやってるのそういうのじゃないから……っていうか観た事ないんだっけ、ウチの公演」

操「いやさ……実の姉が演技してるのなんて恥ずかしいじゃん」

岬「成る程……じゃあアンタはお芝居の楽しさをまだ知らないワケだ。ニヤリ」

操「何その悪い顔」

岬「今度の日曜スケジュール空けといて。一緒にお芝居観に行くよ」

操「急！？何、タカラヅカとかそういうの？」

岬「ううん。劇団クリコン館。ショーゲキジヨ」

○回想…池袋・小劇場の前(夜)

観劇後の大勢の観客の中に岬と操がいる。

操「……」

岬「どうだった操？初めての小劇場は」

操「……」

岬「操？」

操「凄い！凄いねこれ！だって何もないのに全部あるっていうか、凄く格好イイっていうか！ああもうワケわかんないよ！お姉ちゃんもこういうのやってるワケ！？」

操「どうかな……やりたい……が正しいかな」

○回想…池袋駅近くのファーストフード店(夜)

興奮気味に岬に話し続ける操。

○回想…池袋の街(夜)

ファーストフード店を出る二人。尚も興奮気味に話しながら歩く操とそれを聞く岬。

岬「計画通り。すっかり嵌ったみたいね」

操「なんかまだ話足りないくらいだよ、あれ？どこ行くの」

岬「ごめん、先に帰ってて。ついでに新飲用の小道具とか買い出しとかないと」

操「そうか、わかった、じゃあ気を付けてね」

操が地下の駅入り口に消えていく。

操M「ねえお姉ちゃん、私は間違ってたんだよね。

あの時私もお姉ちゃんについて行ったなら、き

つともつと違う結果になったと思うんだ。

あんな……酷いことになんか……」

岬が雑貨店に入ろうとする。すると雑貨店から君香が出てくる。岬、思わず振り返る。

そこに大型トラックが突っ込んでくる。

岬が手のしていた向日葵柄の鞆が落ちる。

○病院・岬の病室（夜）

ベッドに横たわる岬には沢山のチューブが繋がれている。それを見守る操。

操「ごめんね……私お姉ちゃんの代わりになって頑張ったつもりだったんだけど、全然お姉ちゃんにはなれなかったみたい。でもね……大丈夫。助けてくれたんだ。救世主が。だからきつとお姉ちゃんの願い叶えられるよ。だからさ……だからお願い……早く帰って来てね。私……待ってるから」

部屋の入り口付近に立ち、岬に話しかける操をじっと見守る梅山。

○同・待合室

廊下を歩いてやってくる梅山。

待合室には君香がいる。君香、じっと自分の両手をみつめている。

君香「有難うございます……私の我儘を……」

君香、ふと人の気配に気づき梅山の方を見やる。しかしそこには医師しかいない。

医師「どうかしました？ご面会か何かですか」

君香「いえ……もう済みましたんで」

君香がその場を去る。

○吉祥寺北高校・屋上

木刀を持った操、飛鳥、紀絵が君香の掛け声と共に「やあ！」と声を上げ、木刀を振っている。そこに和巳がやってくる。

和巳「え……なんですか……これ」

操「お！待ってたよ、和巳ちゃんの分の木刀もこっちに……」

和巳「そうじゃなくて！何ですこれ？私たち演劇部ですよね!？」

君香「それ!……もう一度同じ事言ってみて。ここ舞台だと思って」

和巳「え?……私たち演劇部ですよね!？」

君香「ストップ!」

君香、和巳に近づき姿勢を矯正。

君香「はい。台詞になった途端に前かがみっと」

和巳「なっ……それよりこれは……」

君香「私たち全国で勝つんだよね。それにはやっぱり人手が足りないと思うんだ」

和巳「それとチャンバラと何の……」

紀絵「蒲田さん、これ」

紀絵、和住に校内のバンドコンテストのチラシを渡す。

和巳「週末のバンドコンテスト？」

操「そう！私が無理言ってその前座で演劇部の時間を貰ったんだよ」

飛鳥「そこでチャンバ……じゃなくてなんでしたっけ？」

君香「殺陣。パフォーマンス。音楽に合わせて刀を振るっていうのかな、それを披露します」

和巳「何でそんなこと……」

君香「簡単なこと。部員を奪って増やす！」

○吉祥寺北高校・バンドコンテスト会場。

体育館に設営された会場。客席はそこそこ埋まっている。

○吉祥寺北高校・バンドコンテスト舞台裏

和装に身を包んだ操、紀絵、和巳の姿。

操「カツチョイイ！馬子にも衣装ってやつだ」

和巳「それ褒めてないですから」

飛鳥「イヤイヤやってたとは思えない気合いの入りようじゃん」

和巳「別にそんなんじゃない。大体部長が勝手に決めたのが悪いんです」

操「でもちゃんとして来てくれた」

和巳「それは……やるからにはイイと思わせないと……ムカつきますから」

君香がやってくる。

君香「ムカつくか。いい言葉。私も一緒だよ、一度引き受けたからには最高の結果を出さないとね……滅茶苦茶ムカツいてきつと死んでも死にきれないと思う」

君香、和巳の眼鏡を外す。

君香「音響照明は私と飛鳥ちゃんに任せて。さ……行っってらっしゃい」

操「はい！！」

○吉祥寺北高校・バンドコンテスト会場。

操、紀絵、和巳がやってくる。

操「い、こんにちは！演劇部です！その……これから前座として殺陣パフォーマンスをお披露目します！えとその……お願いします！！」

○吉祥寺北高校・調光室

君香が隣に座る飛鳥にキューを出す。辺りに大音量で曲がかかる。

○吉祥寺北高校・バンドコンテスト会場。

操、紀絵、和巳、曲に合わせて立ち回りを披露を始める。

○回想…吉祥寺北高校・演劇部部室

操「お願いします！私たちに教えて下さい……知ってること全部！！」

君香「え……でも……私は」

飛鳥「そうか、この人にコーチ頼むってことだ。いいんじゃないそれ。ほら、お兄ちゃんからも頼んでよ」

正太郎「待って待って、そんな簡単に……」

和巳「そうですね、だって部外者じゃないですか」

飛鳥「違う違う、お兄ちゃんの彼女だもの。カンケーシヤ、カンケーシヤ、よし決まりだ！」

紀絵「でもまだご本人がいいとは……」

操「お願いします！私も……私もあの日観たみたいなのドキドキする演劇作ってみたいんです！！」

岬「そうか……私も」

正太郎「え？」

岬「責任……私がとればいいんですよ、みんなを国立に連れてくことで……うん、責任とるよ」

操「本当ですか！？」

君香「本当。願いは必ず叶えてみせる」

○吉祥寺北高校・バンドコンテスト会場。

操、紀絵、和巳が殺陣パフォーマンスをしている。

○回想…吉祥寺北高校・屋上

君香に木刀を渡される和巳。すぐさまそれを返す。

和巳「昨日あれだけ大口叩いておいてなんですかこれ？意味がわかりません。素人が付け焼刃でやったって……」

君香「大して技術は上手くならないと思うよ」

和巳「は？じゃあなんで……」

君香「だって私たちはみんなの技術だけを見せるんじゃないもの。音も照明も全部合わせてみんなが足りないものを補い合う。そうやって出来たもので勝負……そう、お客さんを魅了するんだもの」

○吉祥寺北高校・バンドコンテスト会場

立ち回りを披露する操、紀絵、和巳。しかし次第に疲れてタイミングが合わない場面も見えてくる。それを補うように曲の転調や照明の演出が入る。

○吉祥寺北高校・バンドコンテスト客席

ざわついていた観客もいつしか演劇部のパフォーマンスを黙って見入るようになっていく。そんな中一際真剣に見入る龍太。

○吉祥寺北高校・バンドコンテスト会場

操M「次だ。次のタイミングに合わせて……」

和巳M「部長と交差するように……」

二人、交差するように斬り合う。倒れる和巳。同時に曲が終る。客席からは大きな拍手が沸き起こる。

○吉祥寺北高校・外観

強い日差しが照り付けセミの声も聴こえる。

○吉祥寺北高校・演劇部部室・外

入部届を持った龍太がやってくる。ノックをしてドアを開ける。

○吉祥寺北高校・演劇部部室

龍太「1年C組新堀龍太。こんな時期ですが演劇部に入部したいので……」

操・飛鳥・紀絵「やっぱり来た!!」

龍太「……はあ」

× × ×

椅子に座る操、紀絵、飛鳥、和巳、龍太。

紀絵「私覚えてたんだ。ほら、新堀君オリエンテーションの時剣道部と兼部しようかってずっと悩んでたでしょ？」

龍太「はい、でもあの時はなんか……」

操「女子ばかりだから大好きなチャンバラは出来ないって思った。け・れ・ど」

飛鳥「先週の殺陣パフォーマンスを見て気持ちが変わった……みたいなの？」

龍太「まあそんな感じかな。あの、この前みたいなの稽古って今日もするんですか？」

操「うん。君香さん来たからね」

龍太「きみかさん？」

操「笹君香さん。小劇場の女優さんで私たちのコーチ！私たちを国立に連れてってくれる」

龍太「はあ……とりあえず俺ジャージ取ってきますす！」

龍太が去る。

紀絵「さてと、新堀君が入部してくれたってことは……いけるかな？」

飛鳥「イケますイケます！紀絵先輩の読み通り。あいつコミュ力凄いつて話ですから……」

○吉祥寺北高校・演劇部部室

戸が開くとそこには直樹が立っている。

直樹「あの……龍太に聞いたんですけど、演劇部ってまだ入れるんですか？」

○吉祥寺北高校・演劇部部室

戸が開くとそこには一彦が立っている。

一彦「す、すみません……あの演劇部ってここですか？」

○吉祥寺北高校・演劇部部室

戸が開くとそこには美奈と結衣が立っている。

美奈「あ、いたいた飛鳥。(入部届を見せて)じゃーん、見たよ殺陣の動画」

結衣「私たちも一緒にやってみたいんだけど……いいよね？」

○吉祥寺北高校・屋上

新入部員を含めた全員が発声練習をしている。

君香M「これで9人。音響照明を除いたとして舞台に7人は立てる。なら……アレが出来る」

龍太「君香さん！発声終わりました、次殺陣の練習ですか？」

和巳「セリフも碌に読めないのに何でよ！」

直樹「あ、俺『樽枝』でもいいぜ」

一彦「疲れるから本読みにしようよ」

結衣「新堀君ってセリフ読むと案外イケボでウケるよね」

龍太「だろ」

和巳「あんなのただの棒読みです！」

美奈「どうするキミちゃん？」

君香「え？……キミちゃん？」

美奈「そう、だってそっちの方が呼びやすいし」

飛鳥「お、いいじゃんキミちゃん。今後はそれで行こう」

操「だって、いいよねキミちゃん！」

君香「どうぞおおかまいなく。よし、じゃあ今日は新しいやつ、ウイנקキラーってゲームをしてみようか」

和巳「またゲームですか？だってもう……」

君香「(和住の頭に手を当て) 何？負けるとムカつくから嫌？」

君香を中心に部員たちが集まる。君香がゲームの説明を始める。それをみつめる操M「ねえお姉ちゃん。やっぱりキミちゃんは救世主だったよ。つい2週間前迄4人……うん、3人になるかもしれないなかった演劇部が今じゃこんなに沢山いて、みんな笑って楽しく活動して……そうだよ、きつとこれならいい演劇創れる。」

お姉ちゃんの願い、叶えられると思うんだ」

龍太「部長？今の説明聞いてました」

操「え？あ……ごめん」

君香「はいはいじゃあもう一度だけ説明ね。ウインクキラーってのは」

君香が説明する中、一人やや不満げな顔の和巳。

### ○居酒屋・店先(夜)

君香が店内から出てくる。

君香「お疲れ様です。お先に失礼します！」

君香の肩をポンと叩く正太郎。振り返り驚く君香。

君香「え？」

正太郎「お疲れ様。バイト、今日からだっただんでしょ、初出勤どうだった？」

### ○住宅街(夜)

夜道を二人並んで歩く正太郎と君香。

君香「……」

正太郎「なんかさ、ミカちゃんが飛鳥ん所の手伝いするなんて意外だったけど、でも俺的にはそれで良かったなって今凄く思ってるんだ」

君香「そう……ですか」

正太郎「そうだよ。だってあの日以来ずっと芝居から遠ざかってたでしょ」

君香「あの日……」

正太郎「ごめん、あんまり思い出したくなかったよね。本当にごめ……」

君香「ううん、いいです」

正太郎「……うん。そのさ……なんか変な言い方かもしれないけど、まるでミカちゃんがミカちゃんじゃなくなっちゃったみたいだって思ってたって言うか……」

君香「冷たくしましたよね、彼氏……なのに、ごめんなさい」

正太郎「ごめんなのはこっちだよ。俺はミカちゃんの気持ち全然察することすら出来なかった筈だから。でもさ、こうやってまた芝居に携わるようになって、まあ実際見てるワケじゃないからアレだけど、飛鳥から訊く限りなんか昔のミカちゃんに戻ったのかなとか思ったりさ」

君香「え？私が……君香さんに？」

正太郎「ん？何言ってるの？」

君香「ううん、何でもありません。でも……嬉しいですよ、そう言って貰えると」

いつしか君香のアパートの前に着いている。

正太郎「明日も稽古とバイトでしょ、無理しないでね」

君香「……うん」

正太郎「じゃあ……」

君香「あの！……ごめんなさい」

正太郎「え？」

君香「でも……有難うございます！」

正太郎「うん、こちらこそ、元気になってくれて有難う」

正太郎が去る。それを見送る君香。

ふと庭先に咲く向日葵に話しかける。

君香「ねえ……私、向日葵にはなれてるかな。せめて約束の時まで、太陽でなくても向日葵に」

梅山「あれれ？笹君香を上手く演じ切れているのがそんなに嬉しいですか？」

君香が振り返るとそこには梅山。

君香「また……」

梅山「はい。私だって何度も同じお話を……」

君香「待って下さい」

梅山「んん、いや、お気持ちは分かりますよ。事実彼女は今の貴方のこの奔放な振る舞いを肯定している。被害届が出されていない以上私も強制的にあなたをどうこう出来ない」

君香「だったら……」

梅山「でもこの事象はあつてはならないことなんです。それを黙認するとなると私の部署の責任となってしまうから」

君香「お願いします。ちゃんとその時が来れば……必ず……」

梅山「という言葉を通じて差し上げたいが如何せん難しい。だって貴方、最初の三ヶ月間は……」

君香「分からなかったんです！……自分の身に何が起きたのか。分からない過ぎて死にたいとすら思った……」

梅山「あから物騒だな。でも死なれないでよかったです」

君香「死ぬるワケないじゃないですか……そんな、君香さんを殺すようなこと……」

梅山「好きなんですな笹君香のことが。さぞ辛かったですでしょう。すみませんでした、我々がもっと早く気付いていればよかったです」

君香「……」

梅山「でも、遅まきながら事情は説明して差し上げましたよね。初めてお会いしたあの日の



夜に。彼女は生きてる。貴方の中で今も生きてるって。だから……」

君香「分かってます!」

梅山「いいや分かってない。だから貴方は拒否をする。笹君香が好きだと言いながら彼女の大切なものを奪い続ける」

君香「……違います。私はただ……」

君香、踵を返すと走って自室に戻る。

梅山「……まあいいです。いくらでもお話して分かって貰うのが私の仕事ですから」

いつしか辺りには雨が降り始めている。アパートの庭に咲く向日葵が濡れ、涙のように水滴が落ちるのを見つめる梅山。

○吉祥寺北高校・演劇部部室

部員達が揃っている。

龍太「大会?演劇の?」

操「そう。とりあえず紀絵ちゃんに頼んでエントリーだけはして貰ってたんだけど、そろそろ演目を決めて報告をしないといけないんだって」

直樹「マジか?俺演劇の台本なんて全然分かん」

美奈「紀絵先輩は?」

紀絵「まあ多少は知らなくもないけど……」

結衣「キミちゃん来てから決めようよ。多分知ってるでしょ」

飛鳥「まあ確かに」

和巳「それじゃ遅いです」

操「え?」

和巳「あの人は確かに演技上手くて教えるのも得意かもしれないですけど、でも多分高校演劇のことあまり分かってないですから」

操「え?和巳ちゃん……」

和巳「そもそもコーチが率先して演目の話しないと信じられないです。ゲームで結束力高めるのもいいですけど、他校はきつともう立ち稽古始めてるんですよ。さっさと本決めてウチもゲームより稽古しないと」

飛鳥「相変わらず小姑みたいなこと言うね、じゃあ何、何かアテあるの?」

和巳「あります。今日も幾つか準備してきました」

鞆から幾つも台本を取り出す和巳。

美奈「準備いいじゃん」

結衣「ってか、これずっと持ち歩いてたってこと?」

一彦「ああ、こんなこともあるのかと的なこと言いたかったんだ」

操「凄いいね、有難う和巳ちゃん」

和巳「そんなんじゃないです!あの人が来るの待ってる時間が勿体ないです。さっさと読み

合わせましょう!!」

× × ×

何冊も台本を読み終えて疲れた様子の面々。

飛鳥「凄いね、今日だけでもう5冊も読み合わせしたよ」

操「うん。でもなんか……」

龍太「なあ蒲田、演劇の大会ってテーマ縛りとかあるワケ？」

和巳「はい？」

龍太「いや、だから今年はこのテーマの演劇をして下さいみたいな」

和巳「ないけど……何で？」

龍太「ないのか？いや、お前が持ってきたの全部こう、イジメがどうだとか戦争がどうだとか、そういうのばかりだったからさ、そういうのじゃないとダメなのかなって」

一彦「分かるかも。台本読みの練習で使ってる去年のとは雰囲気違うよね」

和巳「それは……本当何も分かってないんだから。いい、私たちは大会で勝ちたいの。勝つ為には審査員ウケのいい台本がある……」

龍太「それじゃ縛りがあるのと変わらねえじゃん。俺格好イイ演劇したいんだけど」

直樹「まあ殺陣は絶対欲しいよな」

美奈「部長はどう思います？」

操「え？私はその……あはははは、こういうのはどう？キミちゃんの意見も訊いて……」

和巳「急に立ち上がり）ちょっとトイレ行って来ます」

和巳、小走りに部室を飛び出す。入れ違いにやって来る君香。

君香「どうしたの？」

操「キミちゃん……その……」

○吉祥寺北高校・屋上

座って頭をかき筆る和巳。突如立ち上がる。

和巳「(大声で) ムカツク……」

そこに君香がやってくる。

君香「(拍手して) いい発声、すごいすごい。」

和巳「……何の用ですか」

君香「ワイルドすぎない？おトイレって……」

和巳「馬鹿じゃないですか」

君香「ムカついている？相談乗ろうか」

和巳「結構です。貴方と私は合わないんです。本当……あの人が……部長のお姉さんがいてくれたらきつとこんなことにはなつてなかつたんですよ」

君香「……知ってるの？岬さんのこと」

和巳「あの人と一緒に舞台上に立ちたかったのに……だからキチキタに入学したのに……どうして勝手に事故なんかに」

君香「……ムカつくねそりゃ。でもさ、その岬さんならこんな状況でどうしてたと思う？」

和巳「そんなの会ったことないから……」

君香「じゃあ訊き方変える。ターゲットを勝手に絞った芝居と、みんなに楽しんで貰える……ううん、何より自分たちが楽しいと思える芝居。どっちの舞台に立つ松岡岬を観たい？」

和巳「そんなのは……」

君香「どっち？」

和巳「後者ですけど」

君香「じゃあ決まりだ。はいこれ」

君香、和住に印刷したての台本を渡す。

君香「私も同じ、そんな貴方の演技を観たい。だって格好いいんだもん、小さい体でダイナミックに刀振ってる和巳ちゃん」

和巳「はい？い、意味が分かり……大体これ……」

君香「今からそれ読み合わせしよう。私が書いた脚本なんだ」

和巳「これを？」

君香「そう、みんなにアテ書きした」

和巳「書けるんですか脚本？」

君香「書けた。みんなのお陰でね」

和巳「でも……」

君香「知ってる、和巳ちゃんが誰よりも演技に拘りを持ってるって、いつもそうだよね、指先まで注意を払ってキャラクターの機微をどう表現しようかって悩んでる」

和巳「え？」

君香「今ウチの部活でそこまで出来るのは和巳ちゃんの他にはいないと思ってる。だから……どうしても和巳ちゃんに演じて欲しい役柄があるの。お願い、まずは読むだけでもいいから」

和巳「でも脚本書くのは初めてじゃ……」

君香「私を信じて。貴方の憧れた松岡岬の憧れた笹君香のことを。お願い」

和巳「……それは読み合わせして決めますから」

和巳が去る。

君香「……憧れてた……か」

君香、屋上の手すりに手をかける。

君香「(大声で)ムカツク………ったく、私が一番ムカツクよ。なんでこんな……でも……この折角もらった一度だけのチャンス……」

君香、校門前に梅原が立っているのに気づく。梅原、視線を合わせるを会釈。慌ててその場から離れる君香。

君香「……ごめんなさい。もう少しだけ時間を」

○居酒屋・店内

賑わっている店内。

○同・キッチン

慣れない手つきで調理を行う君香。それを見兼ねた岸本が手伝いに入る。

岸本「いいよ、これやっておく」

君香「あ、すみません」

岸本「いいっていいって、君新人さんなんですよ……って？あれ？ひょっとして君香さん？」

君香「え？あの……」

岸本「驚いた、新人って君香さんのことだったんですか？ほら、俺ですよ去年クリコンさんに客演した岸本です」

君香「え？あ……ああ、博士の助手役だった」

岸本「なんちゅう覚え方してるんですか。酷いな、そんなに俺影薄かったですか」

君香「いえ、その、そんなつもりじゃ」

岸本「でも驚きましたよ、やめたんですってクリコンさん」

君香「あ……やめたっていうか、休んで……」

岸本「そっか、あれだ、あの事故ってののせいですか？そんなに悪いんですか？」

君香「ごめんなさい、ちよっとホールのヘルプに行つて来ます」

その場から立ち去る君香

○同・店内

逃げるように君香がやってくる。

君香M「嘘でしょ、まさかこんなところで知ってる人に会うなんて……」

会社員「すみませーん！」

君香「は、はい！」

カウンターで一人飲む会社員にオーダーを取りに行く君香。

会社員「えっと、生一つと、たこわさと……あと、いい加減返して貰えませんか？」

君香「え？」

君香が驚いて会社員を見る。するとその姿は梅山に変わっている。

君香「何で……」

梅山「姿が変わったかって？なに、人にどう認識させるかを変える程度ならそれほど難しくありません。例えば草臥れた殿方、若い女性、ブタ、ロボット、松岡操、あなた」

梅山、その名を口にする度に姿が次々と変わってゆく。

君香「(大声で) やめてー！」

突然の大声に一瞬静まり返る店内。

梅山「大変じゃないですか、人のふりをして生きるだなんて。誰も貴方を本当の貴方として認識なんてしてくれやしない。それに……」

君香「ご注文は以上でよろしいでしょうか」

君香、急ぎ足でキッチンに戻る。

梅山「ほら、そうやってまた演じて逃げようとする。無理しない方がいいのに」

○吉祥寺北高校・体育館ステージ

緞帳の下りたステージでは演劇部員たちが稽古に励んでいる。

操M『雨の向日葵』それがキミちゃんの書いた私たちの演目。主人公の少女はタイムマシンの実験中に意識だけがタイムトリップしてしまい、幕末の世で命を落とした女剣士に転生してしまう。彼女が元の世界に戻る為にはその少女の願いを遂げる必要がある、多くの人々に助けられながら動乱の中に身を投じて行く……って内容なんだけど」

君香が大きく手を叩き稽古を止める。

君香「はい、一度止めるね。和巳ちゃん今のところ凄くよくなった。他のシーンも今の感じを忘れないでお願い」

和巳「はい！」

君香「それと龍太君はもつとセリフを被せて行っていいから。このシーンはテンポ重視で」

龍太「りょーかいです」

君香「あと操ちゃ……」

操「すみません！……分かってます。全然出来てないですよね、折角主役貰ってるのに、足引っ張っちゃってるっていうか……」

君香「……そうね。じゃあ15分休憩、その後で通し稽古ね」

返事をする部員たち。君香、操を気にしながら一旦その場を去る。

龍太「大丈夫ですか部長？」

操「ははは、ごめん格好悪いところ見せちゃって」

龍太「そんなことないですよ。ちゃんと台詞だって入ってるし、動きだって出来てるし、全然出来て……」

操「ううん、お姉ちゃんだったならもつと出来たと思うの。だから私は出来てない」

龍太「部長……」

○吉祥寺北高校・視聴覚室

大型のモニターで前日の通し稽古の様子を見る部員たち。映像が終る。

結衣「凄い！！ねえこれ凄いいんじゃないの？」

美奈「分かる！夏休みに入ってから練習しまくった成果が出てる感じだよね」

直樹「全然セットとかないのにちゃんとそれっぽく見えんのな」

龍太「これ行けんじゃねえか、その大会で一番とるの」

君香「(手を叩いて) はいはい、静かにして。確かにみんなの頑張りのお陰でかなりいい出来に仕上がって来てると思う。でも……どう思う紀絵ちゃん、和巳ちゃん」

紀絵「え？」

君香「二人は去年の公演を知ってるんでしょ」

紀江「その……問題があるとすれば……去年と同じで時間が……」

君香「そう、63分。3分もオーバーしてる。だけどこれはもつとテンポよく芝居を組み立てられればどうにかなる問題。他には？」

和巳「……やっぱり部長がちよつと……」

龍太「は？何でだよ！ちゃんと出来てるだろ！？」

和巳「違くて！それだけじゃダメで……」

操「ああ！！やめてやめて！うん、分かるよ。だって和巳ちゃんは知ってるもんね、お姉ちゃんの演技をさ。でも大丈夫！まだ大会まで2週間あるしさ、大丈夫だよ、うん」

君香M「大丈夫だよ……いつもそうやって周りを安心させようとする、無理に明るい自分を演じようとしてる……なんでだろうね、本当……こんな思いさせちゃって……私はさ……」

○病院・岬の病室

横たわる岬の傍らに座り手を握る操。

花瓶には向日葵の花。

操「もうすぐなんだよ。夏休み終わったら思ったように稽古なんて出来ないしさ、だから今が勝負だったのに……ダメなんだ、私思ったように演技が出来てないんだよ。お姉ちゃんみたいになって思ってるのね……こんなことならちゃんとお姉ちゃんの舞台観ておくんだっただ。ごめんね……私さ……」

そこに梅山が入ってくる。

操「ごめんなさい、面会時間もう……って誰ですか？」

梅山「誰って、医者に決まってるでしょ」

梅山の姿が医者が変わる。

操「あれ？……あの……すみませんでした！」

操が去る。医者は再び梅山の姿に戻る。

梅山「全く、貴方も本当に物好きですね。どうして彼女を放っておくんですか。被害者である貴方さえ訴えを出してくればこちらは強制的にでも……え？……それは貴方、優しいを通り越してただの変わり者ですよ……ははは、本当に面白い方だ、是非一度ゆっくりお話をしたいものです、そう……元の体に戻った時にでも」

○病院・病院前の通り(夜)

病院から出てくる操、入り口付近で正太郎と鉢合わせになる。

操「あれ？確かキミちゃんの……」

正太郎「あ！飛鳥のお友達の？どうしたのこんなところで」

操「……姉がここに入院してるんです」

正太郎「そうなんだ……でもここならきつとすぐ良くしてくれるよ。ミカちゃんもここに入院したけどすぐに退院出来たし」

操「ミカちゃんって君香さんのことですよね、入院って体どこか悪かったんですか？」

正太郎「今はもう全然ピンピンしてるよ。でもほら、事故でさ……」

背後から正太郎の肩を叩く岸本。振り返る正太郎。

岸本「あ、やっぱり君香さんの彼氏さんだ？」

正太郎「うわっ！？だ、誰ですか貴方？」

岸本「彼氏さんまで……俺んなに影薄いつすかね。ほら、去年君香さんとクリコンで共演した岸本です。打ち上げでへべれけになった彼氏さんずっと介抱してあげてたっしょ？」

正太郎「ああ！！そうだ、打ち上げ参加させて貰って……その節は申し訳ありませんでした！」

岸本「別にいいつすよ。それより……援交つすか？」

正太郎「ち、ちちち違います！彼女はミカちゃんのお教えてる演劇部の子で。僕はその……」

岸本「ああ、君香さんのお迎えとか？やっぱりまだ怪我の調子悪いですか？」

操「その怪我って何なんですか？」

正太郎「ミカちゃんから聞いてない？ほら、今年の3月に池袋であつたでしょ、雑貨店にトラックが突っ込んだ事故。ミカちゃんそれに巻き込まれちゃってさ……」

操「え！？」

岸本「災難つすよね、制作さんが大入り袋買い忘れたばかりに」

正太郎「つっていつても、一時期意識は失つたものの外傷なんかは全然で、被害に遭つた人の中では運が良かったっていうか……」

操「ま、待って下さい！でも被害者に笹君香なんて名前……」

岸本「あれ、君香さんって芸名つすよね」

正太郎「そう、本名は佐々木美香。区切り位置変えただけなんだけど……あれ？どうしたの？」

操「私ちよつと急がないと。失礼します！！」

操が走り去る。

○病院前の大通り（夜）

必死に走る操

操M「嘘……嘘でしょ……佐々木美香……キミちゃんがお姉ちゃんと同じ事故にだなんて……」

操、立ち止まるとスマホを取り出しメールを打ち始める。

○吉祥寺北高校・校門前（夜）

一人佇む操。そこに君香がやってくる。

君香「どうしたの急に呼び出すだなんて」

操「その……相談に乗ってほしくて……演技のことで……」

君香「そうか……って言っても今日はもう学校使えないでしょ？」

操「ちよつとでいいんです、帰り道、歩きながらの時間だけでも」

君香「……分かった」

○住宅街の路地（夜）

並んで静かに歩く操と君香。家の花壇や駐車場の猫などを指さしては何やら君香に話しかける操。

○駅近くのコンビニ前（夜）

操がパピコ片手に店内から出てくる。それを二つに割ると一つを君香に手渡しその場で食べ始める。

操「そう、いつもこうやってこのコンビニで買い食いしてたんです」

君香「……これを？」

操「夏は。冬には肉まんとかおでんとか」

君香「……そう……でもあんまり食べると夕ご飯」

操「食べられなくなるからって、いつも一人で半分こしてたんです……そう、そこに咲いてる向日葵見ながら」

操、近隣の家に咲く向日葵を指さす。

操「そういえばキミちゃんも向日葵好きですよね」

君香「……そうかな」

操「だって脚本のタイトル『雨の向日葵』ですよ。それにハンカチも向日葵柄だし、あと台本にもよく出来たシーンは向日葵マーク書いてる」

君香「変なところよく見てるんだから」

操「きつと向日葵だから気になっちゃうんです。お姉ちゃんが大好きな花だから」

君香「……好きなんだ、お姉さんも」

操「向日葵は小さな太陽なんだって。まっすぐに眩しく咲いていつも元気にしてくれる。雲でお日様が隠れていたとしても向日葵を見ればいい。いつだってお日様を見事に演じきって私を元気にしてくれる。だから……私は向日葵みたいな人になりたいって」

君香「面白いね」

操「ですよ。でも私もお芝居はじめてその気持ち何となく分かるようになりました。違う誰かを演じることで誰かを元気にすることが出来るかもしれない。それがお芝居なんじゃないかなって」



君香「言うねえ。でも……それ嫌いじゃない」

操「キミちゃんは気づいてました？私今の今までずっと向日葵だったって」

君香「向日葵だった？」

操「ここに来るまでもずっとお姉ちゃんの真似してたんです。いつも私の左を歩いて、花とか猫とかにすぐ反応して、で、これはキャップの部分に少しだけ多く入ってる方を勝手に選んでる」

君香「え？……それは」

操「私はお芝居なんて素人です。演技のコツなんて全然わかりません。でもお芝居のことが大好きだったお姉ちゃんのことだったら誰よりも分かっているつもりです。だから……だから私は一生懸命お姉ちゃんを演じ続けて来た。ううん、それしか出来なかったんです」

君香「……そう……なんだ」

操「でも私……肝心なお姉ちゃんの演技を観た事なかった。だからいざ役を演じるって言われても、どうやっていいのか……お姉ちゃんならどうするのか全然分からなくて……だからそのせいでみんなの足を引っぱっちゃって……」

君香「違う」

操「え？……キミちゃん……どうしたんです？」

君香「(涙ぐんで)……ううん、何て言うかさ……大変だよ、凄く大変だよね、自分でない誰かを演じ続けることって。だってほら、見えたくないものまで見えちゃうし……でも逆に見えてよかったって思えるものも……きつとあるよね？」

操「……あります」

君香「だったら、その見えたものを表現して。本当のお姉ちゃんじゃなくていいから。貴方の思う、貴方の大好きなお姉ちゃんを舞台に立たせて上げて欲しい……ごめんね」

操「な、なんで謝るんですか！？わかりました。キミちゃんに言われて吹っ切れたっていうか……私は私の思うお姉ちゃんを……必ず国立まで連れて行きます」

君香「さ、じゃあアイス食べたら帰ろうか」

操「待ってキミちゃん！もう一つ訊きたいことがあるんです」

君香「え？」

操「ひよっとしてお姉ちゃんの事知ってませんか……美香さん」

君香「……なんで？」

操「本当は佐々木美香ってお名前なんですよね、その名前知ってます。3月に池袋であった事故……お姉ちゃんが巻き込まれたその被害者で……お名前見た事あります。それに彼氏さんからも……」

君香「言っでなかったっけ……本当にごめん」

操「じゃあ……」

君香「多分……知ってるよ。だってファンレター貰ったことあるから。それのお陰でね、私は辞めたんだ。お芝居を辞めるのを辞めたの。きつとそうなんだ」

操「何で……なんでそんな他人事みたいな言い方なんですか」

君香「だってほら……当人の妹を前にして……何か恥ずかしいんだもの。ほら行こう」  
操「待って！」

君香が去る。追う操。

○駅近くの踏切（夜）

遮断機が下りている。君香が小走りにやってくる。後から操。

操「はあはあ、ねえキミちゃん！……その……お姉ちゃんが好きそうな、物凄くファンタジックっぽいこと言ってもいいですか？」

君香「なに？」

操「キミちゃんといると……なんかお姉ちゃんといえるみたいな安心感があるんです。屋上であったあの日からずっと思っていました。ひょっとして……実は今のキミちゃんは病院のお姉ちゃんが魔法で変身して……」

君香「はははは、なにそれ違うよ。でもね……」

踏切を電車が通る。君香が何かを語りかけているが電車の通過音で一切聴こえない。

やがて電車が通り過ぎ遮断機が上がる。

操「……え？」

君香「さ、明日から稽古もラストスパート。頑張ろう！」

君香が走って踏切を渡って行く。

○地区大会会場・外観

立派な外観の施設。施設前の通りには何台ものトラックが止まり、広場には多くの孝行の演劇部が集まっている。その中に吉祥寺北高校演劇部の姿も見える。

一彦「やばいかも……滅茶苦茶緊張してきた」

飛鳥「ほらほら、肝っ玉小さいと女子にモテないよ、あれくらい堂々としなないと」

龍太「まあ大丈夫だろ。通しだって60分切ってるし、それに何より部長がさ」

紀絵「うん、凄く変わったよね操ちゃん。なんかまるで岬を……」

そこに操が遅れてやってくる。

飛鳥「うわ、部長が遅刻とかマジですか？」

操「ごめんごめん、電車乗り過ぎごしちゃって」

ライトバンが演劇部の近くで止まる。運転席から小田中が顔を出す。

小田中「お、いたいた、おはよーさん」

飛鳥「お、やっと現れたな名前だけ顧問のオダティー！」

小田中「うるせー、こうやって道具運んで来てやったんだから感謝しろ」

紀絵「有難うございます！」

小田中「しかしいいのか？他の学校はトラックだったのに、ウチはこんな少しの……」

気が付くと君香がいる。

君香「いいんです、ウチは具象ではなく抽象舞台。演技と照明と音響で何も無い場所に全て

を作り上げるスタイルですから」

操「キミちゃん？」

小田中「なるほど……で……どちらさん？」

君香「あ！そうかはじめましてなんだ……」

飛鳥「ウチのお兄ちゃんの彼女……さん？」

君香「彼氏さん」

操「演劇部のコーチです」

小田中「そうなの？そんなの初耳だぞ……まあいいや。じゃあ俺先に搬入口つけてるからお前から荷物取りに来いよ」

ライトバンが走り去る。

君香「さ、じゃあ私もここで」

美奈「え？ここでってどういうこと？」

君香「私は今日はお客さんとしてみんなの舞台を観させて貰います。もちろんダメ出しもしっかりつけるから覚悟してね」

直樹「マジか、怖え〜」

君香「みんな……いい芝居期待してる。頑張って!!」

一同「はい!!」

演劇部員たちが移動する中一人佇む操。

君香「ん？どうした？緊張しちゃってるか？」

操「……うん」

君香「世話の焼ける部長だ。さてどうしたものか」

操「ねえ教えて……私……今日まで頑張れたかな」

君香「……訊くまでもない」

操「お姉ちゃんの願い……叶えられるかな」

君香「……叶えて」

操「うん。ねえ……今日まで頑張ったご褒美頂戴」

君香「ガメつい奴だな。何が欲しいの」

操「ご褒美のチューとか」

君香「え？」

操「……なんて嘘。頑張ってくるから……ちゃんと観ててね」

操が走り去る。その通り道には向日葵が咲いている。

君香「ありがとう」

○地区大会会場・劇場内

他高校の演目が終わり緞帳が下りる。客席に明かりがつくと君香は手にした演出ノートに何やら書き込んでいる。そこに小田中がやって来て隣に座る。

小田中「熱心ですね」

君香「オダティー？」

君香が振り向くと小田中は梅山へと姿を変える。

君香「貴方……」

梅山「どうして……なんて訊きます？嫌だなもう、分かっていますよもう、そのつもりなんですよ？」

君香「ひよっとしてあの人から……」

梅山「ええ、そういう約束なんですよ」

君香「その……一つお願いをしてもいいですか」

梅山「こんだけ迷惑をかけておいて？凶々しいな」

君香「お願いします！！」

梅山「……はあ。まったくもう」

○地区大会会場・楽屋

衣装に着替えた演劇部の面々。操、鞆から一通の手紙を取り出しじっとみつめる。

差出人は佐々木美香となっている。

○回想…操と岬の部屋（夜）

岬の机の前に立つ操。

操「お姉ちゃん、いよいよ明日だよ……なんかさ……柄にもなく緊張しちゃうよね。そうだ、ねえお姉ちゃんのお守り借りてくね。ほら、受験の時に持ってたやつ、確か大切そうにしまってたよね……この棚だっけ？」

操が岬の机を物色、すると佐々木美香と書かれた封書を見つめる。

操「これ……ひよっとしてキミちゃんが言ってたファンレターの……返事？」

操が封書を手にする。すると封書の下に便箋を見つめる。それを手にする操。

操「何だろう……（便箋を開き）……もう、相変わらさずお姉ちゃんの字は汚くて何て書いてあるか……ええと……雨の……向日葵？え？これ……」

○地区大会会場・楽屋

じつと手紙をみつめる操の肩を叩く和巳。

和巳「どうしました部長？」

操「え？ううん何でもない」

紀絵「ほら二人とも早く！円陣組むよ！」

和巳「はい！！」

和巳と操が円陣に加わる。

龍太「吉祥寺北高校演劇部！最高に格好良くて面白い芝居をお客さんに見せるぞ！いくぞ

っ！ー！」

一同「オーッ！！」

○同・客席

隣り合って座る君香と梅山。

梅山「さあいよいよ次ですね、貴方にとつての最後の一時間の始まりだ」

君香「違う。これは始まりの一時間ですよ。みんなにとつての最初の一時間」

○同・舞台

緞帳が上がると中央に操が立っている。それを囲むように数人の登場人物。曲が流れると同時に美しい照明を交えた殺陣のシーンが始まる。熱演する演劇部員たち。

操M「松岡岬さん、お手紙どうもありがとうございました。こんなの貰うのは初めてだったから嬉しいのよりも先にまずはビックリが先行してしまって、何を書いていいか分からずお返事が遅くなってしまいました。すみません」

別のシーン。熱演する演劇部員。

操M「私がお芝居をしているのはテレビでも映画でもありません。一回の公演で1000人入るか入らないかの劇場で行う小劇場。宣伝だっっていくらしたところでなかなか見て貰える機会なんてありません」

別のシーン。熱演する演劇部員。

操M「でもそんな中でも私は観に来て頂いたその1000人の心に何かを届けられれば、お芝居を観た後で少しでもいい気分になってもらえればなんて、そんなこと思っただけで続けてきました。でも……正直なところそれを実感するのはなかなか難しいです」

別のシーン。熱演する演劇部員。

操M「私は次の公演でお芝居を辞めよう……そう思っていました。だってほら、いくら想いをお客さんに届けるだなんて立派なこと言っただけでも、本当にそれが出来ているなんて思えなくなってきたから。でも……貴方からもらった一通のお手紙がそれを変えました」

別のシーン。熱演する演劇部員。

操M「演じ続けた成果がちゃんとあった……誰かに……いいえ、貴方にきちんと伝わっていた、それが分かっただけで私はどれだけ救われたことか。有難う。本当に有難う。この感謝の気持ち、このお礼、いつかあなたに形にして伝えたい。けれど今はその術が思いつきません」

別のシーン。熱演する演劇部員。

操M「今私に出来ることは演じ続けること。例えどんなに辛いことがあっても演じ続けること。そして幸せを届けること。もう一度貴方に伝えたい」

エンディングシーン。美しい照明に照らされて佇む操。

操M「(同時に) 有難う」

君香 M「(同時に) 有難う」

割れんばかりの拍手が会場を包む。緞帳がゆっくりと降りる。客席に明かりが灯る。

拍手をしていた君香、拍手を辞めると静かに手をおろす。暫くするとガクンと首が落ちる。驚いて目を覚ます君香。

梅山「やあ、お帰りなさい佐々木さん」

君香「ここは……そうか……今日だったんですね地区大会」

梅山「ええ。はい、これどうぞ」

君香に演出ノートを手渡す梅山。

君香「これは？」

梅山「頼まれてたんです、さっきまで貴方を演じていた彼女に」

君香「(ノートを開いて) ……ええ、もちろん」

○病院・岬の病室

横たわる岬。岬の目元から一筋の涙が伝う。

○吉祥寺北高校演劇部・屋上

雨上がりの屋上。辺りに水たまりが出来ている。そこで龍太たちが殺陣の稽古をしている。そこに和巳がやってくる。

和巳「なに？アンタたちまた殺陣やってるワケ？他にやることあるんじゃないの？」

操「あ、ごめんね和巳ちゃん、ちよつとウォーミングアップ代わりに」

龍太「部長、さっきの手なんですけどもう半歩俺の方に入れません？こう……」

和巳「近寄るな破廉恥男！！」

龍太「な、何だよ別にそんなんじゃないぞ」

直樹「つたく、お前らまた漫才やってんのか？」

龍太「部長、今のところもう一回」

操「え？なんか面倒くさそうだから後にしよう」

龍太「は？意味が分かんないっすよ！」

龍太から逃げるように屋上の扉の前に来る操。

紀絵「ほ、ほらとりあえず人も揃ったし基礎練はじめない？」

飛鳥「そだね、時間的にそろそろ……」

屋上の扉が急に開く、吹っ飛ばされる操。君香がやってくる。

君香「あ、そこにいたの？」

結衣「待ってたキミちゃん！」

美奈「遅い！！」

君香「ちよつと劇団の事務仕事押しちゃってね」

一彦「クリコン館！次いつでしたっけ？」

君香「年末だよ」

和巳「私絶対観に行きますから!!」

君香「ありがとう、でもそのまえに君たちにはやることあるでしょ？」

操「の前に言うことあるんじゃないですか」

君香「ああ部長ちゃん、ごめんごめん」

操「うわ、いい加減な謝罪」

君香「細かいこと気にしない。それよりも君たちがやらないとなのは……」

操「分かっています。次は都大会突破。よろしくお願いします!!」

一同「よろしくお願いします!!」

屋上で稽古を始める演劇部員たち。

校内の花壇に咲く向日葵は雨上がりの雨粒を漳えたまま眩しい太陽に照らされている。

【完】

#### ※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) まで「」報頂きますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

#### ※連絡不要の場合

- ・ 仲間内で集まつての練習でのご利用。
- ・ Skype などを紹介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

#### ※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・ 連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気兼ねなく下記までご連絡下さい。

[gumba1227@hotmail.com](mailto:gumba1227@hotmail.com) (岩本)